

## 中国語 A A B B 型重疊形式の多量性と状態性に 関する試論

### 1. はじめに

本稿は、中国語普通話の A A B B 型重疊形式のうち、とくに名詞性成分から成る A A B B 形式と動詞から成る A A B B 形式（以下、それぞれ「体詞 A A B B」「動詞 A A B B」と呼ぶ）が状態化に至る意味論的動機について考察をおこなうものである。先行研究でも指摘されるように、体詞 A A B B と動詞 A A B B は各々「多量」と「動作の反復」を基本義とするものであるが、これらの中には形容詞 A A B B の如き「状態」の意味を表すものが存在する。以下の例を比べられたい。

- (1) a. 这里的头头脑脑们颇有几分远见、胆识和魄力。(CCL:《人民日报》)[この指導者たちはいくらか先見の明や見識、胆力を備えている。]<sup>1</sup>  
b. 土匪们把所有墙壁都挖得坑坑洼洼（，把箱子柜子都翻得乱七八糟，把铺地的方砖揭起来挖下去，仍然没有找到银元。）(陈忠实《白鹿原》)[盗賊たちは壁という壁を抉ってデコボコにして]
- (2) a. 他说，每天进进出出纽约的成千上万种产品，是由谁安排和指挥的呢？(CCL:《人民日报》)[毎日ニューヨークを出入りする数万種にも及ぶ製品は、誰が手配し指揮しているのだろうか、と彼は言った。]  
b. 头一次见到他，他是那么躲躲闪闪，天知道藏着什么心计……(杨朔《百花山》)[はじめて彼に会ったとき、彼はあんなにもおどおどして、どのような企みを隠しているか分かったものではなかった]

(a)は体詞 A A B B、動詞 A A B B の典型的用例である。(1a)では、体詞 A A B B “头头脑脑”が「多量」の意味で用いられており、連体修飾語や「複数」を表す接尾辞“们”を伴うことから、A A B B がなお体詞性であることが分かる。(2a)“进进出出”は「動作の反復」を表すもので、目的語を伴っているため、これもまだ動詞性を強く残していると判断できる。一方、(b)の例ではこれらが状態の意味に変化している。このことは、“那么(あのように)”のような連用修飾語を伴うことや“V得”の後ろで様態補語として用いられることなどからも明確に裏付けられる。本来状態の意味を持たない

はずの体詞A A B Bや動詞A A B Bがともに何らかの条件下で状態化しているのである。

本稿はこうした現象について考察を行い、体詞A A B Bと動詞A A B Bの状態化には同様の意味論的動機が関わっていることを立証しようとするものである。まず第2節において、中国語のA A B B型に対する本稿の立場を示した上で、体詞A A B B、動詞A A B Bの基本的意味について概観する。また、本研究のキーワードとなる「状態化」という意味的概念についても解説する。第3節と第4節では、状態化した体詞A A B Bと動詞A A B Bの用例を検討しながら、これらのA A B Bにおいてどのような意味論的動機に基づく状態化プロセスが発生しているかを明らかにする。最後に第5節で、本稿の結論として体詞A A B Bと動詞A A B Bにおいて共通の意味派生プロセスが観察されることを指摘する。

## 2. A A B B型重畳形式の認定方法および意味に関する本稿の立場

### 2.1. A A B B型重畳形式および各類の基本義

重畳 (reduplication) は主に語に文法的意味を付加するための手段で、中国語では品詞の別を問わず多用される。A A B B形式は中国語の重畳パタンのうちの1種で、典型的には二音節形容詞がこの形をとって重畳するとされるが、単音節形容詞のペアや、動詞、名詞などもA A B Bの形で重畳することがある。以下にA A B B型重畳形式の例を挙げる。

- (3) a. 干净 [清潔だ] → 干干净净 [ぴかぴかだ]  
 b. 高 [高い]、大 [大きい] → 高高大大 [でかでかとしている]  
 c. 摇晃 [揺れる] → 摇摇晃晃 [ゆらゆらしている]  
 d. 山水 [山河] → 山山水水 [多くの山河]

(3a)が二音節形容詞A Bを原型とする最も典型的なA A B B重畳形式で、(3b)が単音節形容詞AとBから成る形式である。また、(3c)と(3d)はそれぞれ二音節動詞、二音節名詞の重畳形式を示している。このほかに、単音節動詞や単音節名詞から成るA A B Bや、副詞、擬音語などから成るA A B Bもある。

A A B B型重畳形式をとることでどのような文法的意味が付加されるかは、原型となる品詞によって異なる。一般的に言って、A A B B型をはじめとする形容詞の重畳形式は「程度量の増加」を表すと説明されることが多い<sup>2</sup>。例えば、(3a)では原型“干净”に対し“干干净净”では、「清潔さ」の程度が高く、隅々までいきわたっている様子が表される。動詞A A B Bの基本義は「反復 (太田 1958:187 など)」を表すことであり、原型“摇晃”に対して(3c)“摇摇晃晃”では「揺れ」の繰り返し性がより明確に強調される。また、名詞A A B Bの基本義は「多量 (呉・邵 2001)」であり、(3d)では“山水”が“山山水水”となることで、「あらゆる山、川、湖」といった意味を表している。ただ、いずれの下位類にも、本来の意味から離れて、派生的な意味が生じ

ることがある。その顕著な事例の1つが、前節で述べたような状態化した成員である。

なお、AABB型重畳形式には、定義や下位類の分け方の面で、先行研究によって見解が異なる部分があり、注意が必要である。まず、先行研究の中には張誼生 1999、2000、儲澤祥 1999、張斌 2010のように、二音節語ABから構成されるものを「重畳」、2つの単音節語から構成されるものを「疊結」（「複疊」「疊加」などとも呼ばれる）と呼び分け、両者を区別して扱うものがある。本稿では重畳と疊結を区別せず、全てAABB重畳形式であるという立場をとる。このことはつまり、本稿ではAABBをアウトプットとする形態変化を統一的に扱うということにほかならない。ただし、“战战兢兢”などのように、現代語において原型にあたるものが存在しないAABB形式については、考察の対象外とする。

次に、AABB形式の下位類として、形容詞AABB、動詞AABBのような名称が先行研究の中で頻繁に用いられるが、こうした下位類の立て方も研究者によって基準が異なる。下位分類の基準としては、1つには、AABB自身の機能に基づき、AABBを形容詞性、動詞性などに分ける立場がある。例えばある語の振る舞いが状態形容詞に相当すると判断される場合には、その原型が動詞であろうと名詞であろうと、形容詞AABBに分類する。機能を同じくするものは全て同じ類にまとめるべきだとする考え方で、張恒悦 2012などがこの立場をとっている。もう1つの立場は、どちらかといえば伝統的な考え方であり、原型となる語の品詞に基づき、AABBを分類しようとするものである。原型が動詞であれば、AABB自身の文法機能に拘わらず、それを動詞AABBとみなすわけである。複数の機能が1つの下位類の中に混在することになるが、原型と重畳形式の意味・機能の違いを記述する研究においては、こうした立場を採ることが求められる。本稿の関心の対象は、前節(1)(2)でも示したように、原型において品詞を同じくするAABBがなぜ異なる意味を表しうるのか、という点にあるため、本稿では後者の分類基準を採用する。

## 2.2. 「体詞」の範囲

本節では「体詞AABB」を構成する名詞性成分の範囲を確認しておくことにする。名詞性成分と言う以上、名詞によって構成されるケースが最も典型的であるが、実際には量詞、数詞、方位詞、区別詞といった名詞以外の名詞性成分を原型としてAABB形式が成立することもある。しかしながら、「多量」を表すという基本的意味は共通しているため、本稿では、全ての名詞性成分から成るAABBを1つの類とみなし、「体詞AABB」と呼んでいるのである。以下に挙げるものは全て、本稿では体詞AABBとして扱う。

- (4) 花花草草〔たくさんの草や花〕【名詞】、字字句句〔一字一句〕【名詞+量詞】、分分秒秒〔毎分每秒〕【量詞】、三三两两〔三々五々〕【数詞】、里里外外〔中も外も〕【方位詞】、男男女女〔男たちと女たち〕【区別詞】……

### 2.3. 本稿における原型の定義

A A B Bの原型をどのように認定するかは、研究者の主観に任される部分が多く、必ずしも明確な定義に拠って判断が下されてきたわけではなかった。本稿では便宜的に、「A A B Bから抽出される最大の語」を原型とみなすこととし、その原型の品詞に基づきA A B Bを分類していく<sup>3</sup>。例として“马马虎虎 [いい加減である]”“来来往往 [行き来する]”“家家户户 [家々]”という3つの語を挙げて説明してみよう。まず、“马马虎虎”という形式からは、“马虎”という二音節語しか抽出できない（この意味の場合“马虎”は二音節一形態素である）ため、形容詞“马虎”を原型とみなす。したがって、“马马虎虎”は形容詞A A B Bに分類されることになる。“来来往往”からは、“来”と“往”“という2つの単音節語のほか、“来往”という二音節語を抽出することができるが、最大の語を原型とみなすという原則に従って、動詞“来往”を原型とする。“来来往往”は動詞A A B Bである<sup>4</sup>。“家家户户”からは、名詞“家”、量詞“戸”が抽出できるが、“家戸”が語としては成立しないため、“家”“戸”を原型とする重畳形式で、体詞A A B Bであるとみなすことができる。

やや問題なのは、“老少少少 [老いも若きも]”“生生死死 [生きるも死ぬも]”のような語で、これらからは二音節語A Bと単音節語A・Bを抽出することができるが、それぞれ品詞が異なっている。“老少 [老人と若者]”が名詞であるのに対し、“老 [年老いている]”“少 [若い]”は形容詞、“生死 [生死]”が名詞であるのに対し、“生 [生きる]”“死 [死ぬ]”は動詞である。しかし、この場合も原則に従い、A Bを原型とし、ともに体詞A A B Bとして扱うことになる。

### 2.4. 本稿における「状態化」の定義

本稿は、体詞A A B Bや動詞A A B Bがどのような条件で状態化するか、という課題に取り組むものである。体詞A A B Bと動詞A A B Bの「状態義」ないし「状態化」については、先行研究でもたびたび言及されているが、多くの研究において「状態」「状態化」といった用語の指すところが明確ではなく、母語話者の主観に強く依存している印象が拭い去れなかった。そこで本節では、本稿における体詞A A B Bと動詞A A B Bの「状態化」の認定基準を明確に示しておくことにする。

本稿では、体詞A A B Bと動詞A A B Bの状態化を、形容詞A A B Bへの意味的接近であると仮定する。形容詞については、张国宪 2006:15 が「性質」「状態」「変化」の3つの意味を表し得るとしており、それぞれと相性の良い語用論的意味、文法機能との対応関係を以下のようにまとめている。

(5) 意味レベル	語用論的意味	文法機能
性質	断定	連体修飾語
状態	描写	連用修飾語／述語
変化	叙述	述語／補語

(张国宪 2006:15 参照)

これによると、「状態」とは、語用論上は「描写」の働きを担うものであり、文中では

連用修飾語や述語として実現しやすい意味概念である。そこで本稿ではまず、「(主語に立つモノやコトの有様に対する描写として) 述語の形で実現する」という点を状態化の認定基準の1つとして採用することにしたい。张国宪 2006:15 の指摘では、連用修飾語も状態と相性の良い文法機能であるとされるが、副詞的な働きしか持たない一部のAABBを考察の対象から除外するため、認定の基準としては述語用法の有無のみに注目することにしたい<sup>5</sup>。

しかし、動詞AABBは基本的に述語用法を備えているため、この基準だけでは状態化の有無を認定することはできない。実のところ、動詞AABBの多くは何らかの意味での状態性を本来的に備えているのであるが、本稿ではその中でもより形容詞AABBに近い状態性を備えた成員を限定するために、もう1つの認定基準として「基本義が喪失または背景化している」という点を用いることにしたい。

まとめると、本稿における体詞AABBと動詞AABBの状態化は、以下の基準によって定義されることになる。本稿ではこの基準を満たすもののみを「状態化」と考える。

(6) 体詞AABBと動詞AABBの状態化の認定基準

- ① モノやコトに対する描写として述語の形で実現する
- ② 基本義が喪失または背景化している

### 3. 体詞AABBの状態化

#### 3.1. 体詞AABBの基本的用法

2節での原則に基づくと、以下のようなものが体詞AABBに含められることになる。

- (7) 疙疙瘩瘩 [ぶつぶつ]、角角落落 [隅々]、方方面面 [各方面]、男男女女 [男女入り混じる]、村村寨寨 [村々]、风风雨雨 [多くの苦難]、子子孙孙 [子々孫々]、山山水水 [山々、川、湖]、分分秒秒 [毎分毎秒]、上上下下 [上から下まで]、里里外外 [中も外も]、花花草草 [たくさんの草花]、头头脑脑 [指導者たち]、老老少少 [若いも若きも]、生生死死 [生きるも死ぬも]、是是非非 [是々非々]、家家户户 [家々]、瓶瓶罐罐 [瓶やら缶やら]、坑坑洼洼 [穴ぼこ]、星星点点 [点々]、斑斑点点 [まだら]、泥泥水水 [どろどろ]、三三两两 [三々五々]、风风火火 [威勢が良い]、婆婆妈妈 [口うるさい] ……

以下、体詞AABBの意味と文法機能を概観しておく。

体詞AABBの基本義は、「多量」を表すことにある。以下の例を見られたい。

- (8) 这个村庄家家户户都养蚕。(吴·邵 2001:14) [この村は各家が養蚕を営んでいる。]
- (9) 他家里坛坛罐罐放了一大堆。(吴·邵 2001:14) [彼の家は壺やら甕やら大量に置かれている。]

- (10) 她敌视那些男男女女落在母亲身上的目光，不管那里面是什么意思。(吴·邵 2001:14) [彼女はあの男たちや女たちが母の体を見る視線を敵視していた、例えそれがどういう意図であったとしても。]
- (11) 这个咒言将祖祖孙孙(子子孙孙)地传下去。(吴·邵 2001:15) [この呪いは子々孫々にわたって伝わっていくだろう。]
- (12) 圣诞树上上下下挂满了礼物。(吴·邵 2001:15) [クリスマスツリーは上から下までプレゼントがいっぱいに掛けられていた。]

吴·邵 2001 によれば、この 5 例の A A B B は、それぞれ異なる派生的意味を含んでいるが、全て「多量」の意味を表すという点では共通している。例えば、(8)の文脈で A A B B は「村の家一軒一軒」という逐一对応を含意し、(9)の例では「壺や甕を代表とする容器の類」を広く表すという一種の「汎説 (大河内 1969)」として用いられているが、いずれの状況も「多量」に事物が存在するという点に変わりはない。同様に (10)(11)(12)の例も、それぞれ「入り乱れるさま」「相次いで」「あちこちに、そこらじゅうに」という含意を持つとされるが、やはり「多量」であることに変わりはない。なお、体詞 A A B B の基本義は「複数 plural」と説明される場合もあるが、体詞 A A B B は最少の複数である「2」の意味を表しえないことや、元来「複数」の意味を持つ語(“疙瘩 [ぶつぶつ]”)も A A B B の形で重畳する(“疙疙瘩瘩”)ことなどを考慮すれば、「多量 increased quantity」と解釈するほうが妥当である。

体詞 A A B B の統語機能は成員によって多少の違いが見られるが、多くは主語や目的語となることを主とする。(11)の“祖祖孙孙 (子子孙孙)”のように意味的に時間の流れを含むものは“地”を伴い連用修飾語となることも多い。

- (13) 这里的头头脑脑们颇有几分远见、胆识和魄力。(CCL:《人民日报》)【主語】  
[このリーダーたちは、いくらかの先見の明、胆力と気力を備えている。]
- (14) 他咬咬嘴唇，又去踢地上的瓶瓶罐罐。(CCL:《人民日报》)【目的語】[彼は唇を噛むと、また地面の瓶やら缶やらを蹴った。]
- (15) 这个咒言将祖祖孙孙(子子孙孙)地传下去。(=(11))【連用修飾語】

### 3.2. 体詞 A A B B の表す状態義

体詞 A A B B の中で述語用法を持つものは、以下に挙げた一部の成員に限られる。これらの成員は更に、A B (または A、B) が現実存在するか否かに基づいて 2 つの下位類に大別することができる。これを仮に〈甲類〉〈乙類〉と呼び分けることにする<sup>6</sup>。

- (16) 述語用法を持つ体詞 A A B B

〈甲類〉= A B (A、B) が現場に存在するもの

斑斑点点 [まだら]、疙疙瘩瘩 [ぶつぶつ]、坑坑洼洼 [でこぼこ]、沟沟坎坎 [でこぼこ]、泥泥水水 [どろどろ]、星星点点 [ぼつぼつ]、三三两两 [三々五々]、点点滴滴 [ぼつぼつ]、风风雨雨 [苦難に溢れて

いる] ……

〈乙類〉= AB (A、B) が現場に存在しないもの

风风火火 [勢いがあるさま]、婆婆妈妈 [くどくどしい]、花花草草 [浮  
ついている] <sup>7</sup>……

以下、節を分けて〈甲類〉〈乙類〉の特徴を述べ、これらの類が何を動機として状態化しているか考察したい。

### 3.2.1. 〈甲類〉の特徴

前節で示したように、〈甲類〉の特徴は、AB (A、B) に相当する事物が実在することである。その意味で〈甲類〉AABBは、体詞本来の機能である指示機能を完全に失ってはいない。「多量」という意味機能も失っておらず、したがって、〈甲類〉AABBの多くは、多量のAB (A、B) を表す体詞性成分として主語や目的語の位置で用いられうる。

(17) (五十年代, 美国画家杰克逊·波洛克作画时把画布铺在地上, 以迷狂的状态挥动画笔, 泼洒颜料,) 甩在画面上的斑斑点点显现出画家作画时近似疯癫的运动轨迹。(CCL:《作家文摘》) [画面上にまき散らされた点々は画家が絵を描く際の狂気にも似た動きの軌跡を浮かび上がらせた。]

(18) 他连续4天不辞辛劳, 陪同考察同志走遍了地上的坑坑洼洼。(CCL:《作家文摘》) [彼は4日連続で苦勞をいとわずに、調査隊員に付き添って地面の穴という穴を歩いて回った。]

(17)は“斑斑点点”が主語、(18)は“坑坑洼洼”が目的語となる例である。AABBが連体修飾語を伴っていることにも注意されたい。

重要なのは、〈甲類〉のこうした特徴が、述語となる場合においても、同様に観察される点である。以下は〈甲類〉の述語用法の例である。

(19) 她卷起袖子, 胳膊上斑斑点点, 青一块, 紫一块。(老舍《鼓书艺人》) [彼女が袖を巻き上げると、腕はまだら模様で、あちこちに青や紫のあざがあった。]

(20) 三间低矮的土木结构住房, 墙上裂缝满目, 地上坑坑洼洼。(CCL:《人民日报》) [3部屋の低い土木構造住宅は、壁は一面ひびだらけ、床はでこぼこだった。]

(21) (……) 可那天杨清民没穿制服, 又是刚刚到郊区办案回来, 一身泥泥水水的, 服务员就没把他放在眼里, 说就这样, 爱吃不吃。(CCL: 谈歌《城市警察(5)》) [しかしその日楊清民は制服を着ておらず、また郊外の案件から戻ったばかりで、全身ドロドロだったため、店員は彼に注意を払わず、それならお好きにどうぞといった。]

(22) 日前记者前往温州采访时, 从飞机舷窗俯瞰大地, 只见白色坟墓星星点点, 颇为壮观。(CCL:《人民日报》) [先日記者が温州へ取材に向かったとき、飛行機の窓から大地を俯瞰すると、白い墓が点在しているのが見え、実に壮観だった。]

(23) 8月的阳光, 轻抚着广场上的绿树、红花。人们三三两两, 来到这座雕像前参

観，合影。(CCL：《报刊精选》) [8月の太陽が、広場の緑樹や赤い花を包んでいる。人々は一組また一組と現れて、この彫像前にやってきて観覧し記念撮影していた。]

いずれの例においても、AB (A, B) が現場に実在していることが読み取れる。ただ、〈甲類〉AABBは、単に存在の意味を表しているのではない。結論を先に言えば、〈甲類〉が共通して表しているのは「特定の領域における多量のAB (A, B) の分布様態」である。例えば、(19)は多量のあざのために腕中がまだら模様(“斑点”)になった状態を表しているし、(20)や(21)も地面がどこもかしこも穴ぼこ(“坑”“挖”)だらけという状態や全身泥まみれという状態を表している。言ってみればこれらは「ある領域がAB (A, B) で溢れかえっている異常な状態」を表しているのである。これら3例の表す状態は「遍満状態」と呼ぶことができる<sup>8</sup>。これに対し、(22)は遍満状態ではないが、飛行機から見下ろした大地に白い墓が点々と存在していることを表しており、「まばら」という分布様態を描くものであると見なすことができる。(23)も同様に、広場における少人数のグループのまばらな分布を描いている例である。

以上の例は、〈甲類〉AABBが「多量のAB (A, B)」という含意を残しながら、むしろ「分布様態」を表すことに重点が移っていることを示している。〈甲類〉AABBにおいて上記のような「分布様態」としての意味が成立する背景には、以下の2つの要因が関わっているものと思われる<sup>9</sup>。

1 点目は、文脈上、AB (A, B) の分布する領域が明確に設定されているということである。上の例においては、点線を引いた箇所がこの分布領域に相当し、〈甲類〉AABBは一般にこの特定領域の描写に用いられる。「遍満状態」を表す(19)から(21)の例では一般に存在領域を主語にとり、直接の描写対象とする。(22)(23)のように「まばら」という分布様態を表すものは別の事物を主語にとるが、やはりこの主述構造全体が当該領域に対する俯瞰的な情景描写となっている。いずれにせよ、多量のAB (A, B) という意味が背景化し、代わってその分布領域のほうが前景化していると言えるだろう。

2 点目の要因として、個々のAB (A, B) の離散性が極めて弱いという点が挙げられる。〈甲類〉AABBは、確かに「多量」という本来の意味を保持しているが、実際には〈甲類〉は、ごく小さなモノや明確な形を持たないモノの集合を表す場合が多い。例えば、“疙疙瘩瘩”“星星点点”などはごく小さなモノの集まりだし、“泥泥水水”などは不可算の物質の集合である。また、“斑斑点点”“坑坑洼洼”も明確な形を持つとはいえ、個体間の境界が極めてあいまいであると考えられる。こうした物体が多量に集まると、集合を構成する個々の成員には極度に目が向きにくくなり、全体を1つのまとまりとして捉えようとする傾向が強くなる。例えば、皮膚が荒れた状態を指して“疙疙瘩瘩 [ぶつぶつ]”というとき、1つ1つの赤みや吹き出物に注意は向けられておらず、集合全体を1つの皮膚異常と捉えているはずである。“疙疙瘩瘩”には確かに何らかの意味での「多量性」が含まれているはずなのに、その構成要素を1つ



1 つ数え上げるようなことは、我々は普通はおこなわない。言ってみれば、この集合内部は、不可算かつ均質なものとして認識されているのである。このような認識の変化は、個から集合への「イメージスキーマ転換 image schema transformation (Lakoff1987:441)」であると考えられるが、この認知的要因こそが状態化を促す重要な引き金となっているのである。対照的に、典型的な体詞AABB、例えば“山山水水”“头头脑脑”などは、山や湖、人間など比較的目立つ個体の集まりであり、個の背景化が起りにくいのだと考えられる。体詞AABBにおいて〈甲類〉に属す成員が状態化し、典型的な成員が状態化しない理由は、こうした観点から説明がつく。

これら 2 つの条件が満たされた場合に、分布領域と存在物の間に「図と地の反転」が起り、「分布様態」という〈甲類〉特有の状態義が生じるのだと考えられる。多量のAB (A、B) が均質な集合を成し、特殊な分布をもって特定の領域を覆い尽くすことで、存在物ではなく、分布領域のほうにより強い注目が向けられるようになるのである。

### 3.2.2. 〈乙類〉の特徴

〈乙類〉AABBの最大の意味的特徴は、AB (A、B) に対応する事物が現場に存在しないことである。以下の例が示すように、〈乙類〉は指示機能や体詞性を完全に喪失しており、主語や目的語として生起することはなく、専ら状況描写のために用いられる。

(24) 如今黄振炎依然浑身是劲，整天风风火火。(CCL:《报刊精选》) [黄振炎は今も依然としてエネルギーで、一日中意気揚々としている。]

(25) 你简直太婆婆妈妈了! (CCL:《读者》) [君はまったく口うるさすぎる!]  
例えば、(24)のような状況で“风[風]”“火[火]”は実際には存在せず、“风风火火”は「意気揚々として活力に溢れるさま」を表している。同様に(25)でも、“婆婆[姑]”や“妈妈[母]”は存在せず、「口うるさいさま」を表すに過ぎない。これらは明らかに、〈甲類〉のように多量のAB (A、B) の存在によって分布様態を表すといったものではない。

〈乙類〉に状態義が成立する動機としては、先行研究において「転指(张谊生 1999:61)」「汎化(储泽祥 2009:28)」「比喻(储泽祥 2009:29)」などの概念が挙げられているが、より正確には「原因から結果へのメトニミー」と考えるべきであろう。例えば、「風と火が同時に存在する状況」はしばしば「(火が風に煽られて) 激しさを増す」という結果をもたらすが、“风风火火”では日常で繰り返し観察されるこうした因果関係の隣接性を基盤として「勢いがある様子」へのメトニミーが成立している。また、「姑や母親がいる状況」は容易に「口うるさく言う」といった事態を想起させることから、“婆婆妈妈”において「口うるさい様子」へのメトニミーが成立するわけである。

以上で見たように、体詞AABBの状態化には少なくとも2つのプロセスが存在していると考えられる。1つは、3.2.1節でみたような、個の背景化、多量義の背景化に

基づくもので、図と地の反転という認知上の要因が状態化の動機となっている。いま1つは、本節でみた状態化であり、こちらは「原因から結果へのメトニミー」が動機となって引き起こされる種類のものである。

## 4. 動詞 A A B B の状態化

### 4.1. 動詞 A A B B の基本的用法

本節ではまず動詞 A A B B の主な成員を紹介し、それらの意味および文法機能を確認する。動詞 A A B B の代表的成員としては以下のようなものが挙げられる。

- (26) 嘟嘟啾啾 [ぶつぶつ言う]、支支吾吾 [もごもご話す]、喃喃咕咕 [ひそひそ話す]、踉踉跄跄 [ふらふらよるめく]、哆哆嗦嗦 [ぶるぶる震える]、吵吵闹闹 [がやがや騒ぐ]、摇摇晃晃 [ゆらゆら揺れる]、遮遮掩掩 [こそこそする]、拖拖拉拉 [ずるずる引き延ばす]、磕磕绊绊 [つまづきながら歩く]、拉拉扯扯 [いちゃいちゃする]、指指点点 [後ろ指をさす; あれこれ指図する]、偷偷摸摸 [こそこそする]、吞吞吐吐 [もごもご話す]、来来往往 [行ったり来たりする]、来来回回 [行ったり来たりする]、进进出出 [出たり入ったりする]、走走停停 [進んでは止まる]、分分合合 [くっついたり離れたりする]、说说笑笑 [賑やかに談笑する]、吃吃喝喝 [食べたり飲んだりする]、哭哭笑笑 [泣いたり笑ったりする]、缝缝补补 [裁縫をする] ……

動詞 A A B B の最も基本的な文法的意味は「反復 (太田 1958:187)」であり、より一般的にはこれも「多量 increased quantity」の一種である。「反復」の意味は更にくっつかに下位分類できるが、その詳細については張誼生 2000、池田 2013 に譲ることとし、ここでは動詞 A A B B の主な用法の中で「反復」の概念が核として存在していることだけ確認しておく。

- (27) 那天晚上凤霞摸着二喜送来的花布，看看笑笑，笑笑看看。(余华《活着》) [その晩鳳霞は二喜からもらった更紗を触りながら、眺めては笑い、笑っては眺めしていた。]
- (28) 在那种小旅馆里，旅客来来往往，人流五方杂处，男女同居没人管的。(海岩《河流如血》) [あの手の小さな旅館では、客がひっきりなしに行き交って、様々な地方の人が一緒になるので、男女の同室など誰も気にも留めない。]
- (29) 保良跌跌撞撞冲出这间卧室，看到卫生间的门上已经鲜血淋漓。(海岩《河流如血》) [保良がつまづいたりぶつかったりしながら寝室を飛び出ると、トイレのドアがすでに血に染まっているのが目に入った。]
- (30) (……) 哭哭笑笑那是常有的事，委实有点儿神经不正常。(魏魏《姐姐》) [泣いたり笑ったりは日常茶飯事で、本当に情緒不安定気味だ。]

単一の動作主が2つの動作を交替でおこなう場合 ((27)) もあれば、複数の動作主が無秩序に動作をおこなう場合 ((28)) や類似の動きが無規則に繰り返される場合 ((29))

もあるが、いずれの例でも動作や動きが繰り返し生じているという点では共通している。さらには、動作の繰り返しがより長いスパンにおいて観察され、習慣的事態として解釈されるようになると、(30)のような総称指示用法に派生していく（池田 2013:195）。

文法機能の面では、述語用法を主とする（(28)など）が、連用修飾語としても多く用いられる（(29)）ほか、一部の成員は主語や目的語になることもある（(30)）。動詞性を色濃く残す成員は目的語を伴ったり（(31)）、アスペクトや介詞句を伴ったりもする（(32)）（張誼生 2000:214-215）。

(31) 他说,每天进进出出纽约的成千上万种产品,是由谁安排和指挥的呢? (= (2))

(32) “形象工程”帕台农神庙已经修修补补了20多年(,也被列入喊停的项目中,由于是年代久远的历史古迹,对它的“美容”工作小心谨慎、异常缓慢。)(CCL:新华社新闻报道) [「形象プロジェクト」の帕台農神廟はすでに 20 数年も修繕を繰り返しており]

#### 4.2. 動詞AABBにおける状態義の背景化

動詞AABBの状態化については、先行研究の中でもたびたび指摘されてきたが、何を以て状態化とみなすかという点で共通の認識が得られていないため、十分に議論が深まっているとは言えない状況にある。また、状態化を促す動機についても未だ本格的な検討はなされていない。工藤 1995 が指摘するように「反復」とは「線として（継続的）」（同:147）に捉えられる側面を持ち、「状態」という概念とも繋がり得るものであるため、動詞AABBにおいて「反復」と「状態」を截然と区別することには本質的な難しさが伴うのである。先行研究の認識が一致を見ない主たる原因はここにある。

そこで本稿では、2.4 節の定義に基づいて状態化の有無を判定することを試みたい。「述語になること（①の条件）」は動詞AABBにとっては基本的な機能であるため、とりわけ「②基本義の喪失または背景化」という点が、状態化の有無の判定にとって決定的な要因となる。②の条件を満たし、動作義及び反復義が喪失または背景化したものは、純粋な状態のみを表している（状態化している）と判定するわけである。本稿はこの基準により、以下のものを状態化した成員であると認定する。

(33) 状態化した動詞AABB

嘟嘟啾啾 [ぶつぶつ]、支支吾吾 [もごもご]、踉踉跄跄 [よたよた]、趑趑趑趑 [よたよた]、哆哆嗦嗦 [ぶるぶる]、摇摇晃晃 [ふらふら]、遮遮掩掩 [こそこそ]、拖拖拉拉 [ずるずる]、躲躲闪闪 [こそこそ]、磕磕绊绊 [よたよた]、跌跌撞撞 [まろび転びつ]、颤颤抖抖 [ぶるぶる]、犹犹豫豫 [躊躇するさま]、吞吞吐吐 [もごもご]、偷偷摸摸 [こそこそ] ……

“偷偷摸摸”を除けば、いずれも客観的には動作AB（A、B）が存在しているが、次節で述べる理由により、AABBの動作義は背景化していると考えられるものであ

る。なお、先行研究では、ここに挙げられていない一部の成員を状態化したものとして扱っている場合がある。例えば、“说说笑笑”が状態化した成員として扱われることがあるが、本稿では“说”や“笑”という動作義が完全に背景化していないことから、この種のもは「動作と様態が混然一体となった（池田 2013:195）」状況を表すものであると考え、(33)のような純粹に状態義を表す成員とは区別することにしたい<sup>10</sup>。原型A B（A、B）の動作義が積極的に表出されて、背景化に至っていないものは、本稿では状態化とはみなさない。

#### 4.2.1. 状態化した動詞A A B Bの特徴

状態化した成員は、既に述べたように、客観的事実として動作A B（A、B）が現場に存在していたとしても、言語表現の意味としては動作義が背景化してはならない。この点で、“进进出出 [出たり入ったりする]”などの典型的成員とは異なっている。

これらの成員において動作の意味が背景化していることは、これらが態度叙述文などの構文に生起し動作を表す名詞句またはV Oフレーズを主語に取ることから確認できる（池田 2013:182）<sup>11</sup>。

- (34) 他 说话 嘟嘟啾啾的。[彼はぶつぶつとしゃべる。]  
 (35) 他 走路 摇摇晃晃的。[彼は歩き方がフラフラしている。]  
 (36) 他 做事 犹犹豫豫的。[彼は仕事ぶりが自信なさげだ。]  
 (37) ??他们 说话 吵吵闹闹的。<sup>12</sup> [彼らは話し方が騒がしい。]  
 (38) \*他们 走路 来来往往的。[彼らは行ったり来たり歩いている。]

例(34)から(36)が示すように、これらの成員は“说话”“走路”などの動作を主語に取る。動作を主語に取る以上、述語部分で更に動作を表す語が生起することは許されず、ここから動作の意味が背景化していると判断することができる。一方、(37)(38)が示すように“吵吵闹闹 [がやがや騒ぐ]”“来来往往 [行ったり来たりする]”といった成員は動作を主語とすることができないため、動作義が背景化していることを確認することができない。

これらのA A B Bは、動作義や反復義ではなく、むしろ動作の様態の意味に特化しており、専ら「動作の非効率性」を描写する。例えば、“摇摇晃晃 [ふらふら]”という様態は「歩く」という動作にとって妨げになるものだし、“嘟嘟啾啾 [ぶつぶつ]”という様態も「話す」動作が正常に行われていないことを表すものである。

これらの成員に共通する特徴としては、以下の2点が観察される。1つは、これらが表す反復は内部均質的で、反復を構成する個々の動作の離散性が極めて弱いということである。例えば、“摇摇晃晃 [ゆらゆら]”は“揺 [揺れる]”や“晃 [揺れる]”といった動作の反復を表すわけだが、一連の動きの中でどの部分が“揺”でどの部分が“晃”かといったことを認識するのは不可能である。客観的には明らかな反復的事態でありながら、反復を構成する1つ1つの要素を特定することが難しく、全体を1

つの状況として捉えるほかないのである。同様に、“趑趑趑趑〔よたよた〕”“嘟嘟啾啾〔ぶつぶつ〕”等の状況も、明らかな反復性を有しながら、個々の構成要素に分解することができない。このように、類似の動作が繰り返されてその違いや境界が曖昧になる場合や、ごく些細な動き・しぐさが繰り返される場合に、個々の動作に対する注意が失われ、全体を1つのまとまりとする認識が生じるのである。“走走停停”などのように、1つ1つの動作の境界が明確で、分析が容易であるものとは対照的である。体詞AABBの場合と同様、この認識の変化にも「イメージスキーマ転換 (Lakoff1987:441)」が関わっている。2つ目は、これらの成員が表す事態は、より基本的な動作を背景として実現し得るものだという点である。“摇摇晃晃”“嘟嘟啾啾”等の表す「ふらふら」「ぶつぶつ」といった事態は、小さな細かい動きの集合であるがゆえに、「歩く」「話す」といった基本動作と矛盾することなく、それらの付帯状況として同時に実現することが可能である。“摇摇晃晃”などの成員が基本動作の様態たり得るのはこのためである。これに対し、“走走停停〔進んでは止まり〕”“吵吵闹闹〔がやがや騒ぐ〕”などは「進む」「話す」といった基本動作の範囲を逸脱するものであり、より複雑な状況を表していると考えられる。

以上の2つの特徴によって、動詞AABBの状態化が促されることになる。反復的な動きが一連の均質なまとまりと捉えられることによって、反復としてではなく、それらを包摂する基本動作の様態としての解釈が優先されるようになるわけである。ここでも反復的な動きと基本動作の間で「図と地の反転」が起こっていると考えられる。

#### 4.2.2. “偷偷摸摸”の状態化プロセス

状態化した動詞AABBのうち、唯一異なる派生プロセスを経ていると考えられるのが“偷偷摸摸”である。この成員は単に「こそこそしている」という様態を表すものであり、動作A、Bが本来持つ「盗む」などの意味は完全に失われている。ここには、恐らく「原因から結果へのメトニミー」が関わっているものと考えられる。すなわち、「盗む」という行為が、「こそこそ」という様態を伴うことは容易に連想されることであって、こうした恒常的な因果関係の隣接性を基礎として、メトニミーが成立しているのである。“偷偷摸摸”は状態化した動詞AABBの中にあって、やや特殊な意味派生プロセスを持つ成員であると考えられる。

### 5. まとめ——AABBの2つの状態化プロセス

本稿では、体詞AABBと動詞AABBの状態化を促す意味論的動機について検討をおこない、体詞AABBと動詞AABBの状態化には、少なくとも2つの意味派生プロセスが存在していることを明らかにした。3節と4節で、体詞AABBと動詞AABBの状態化を個別に検討したが、とりわけ注目すべきは、これらが実質的に同じ

状態化プロセスを共有しているという点である。

これらに共通して見られる状態化プロセスの 1 つは、「図と地の反転」である。離散性に乏しい多量のモノや動作が集合を成すとき、しばしば個に対する注意は失われ、集合全体が 1 つの均質的なまとまりとして認識されるようになる（イメージスキーマ転換）。この均質的集合が、特定の領域や基本動作の中で分散すると、注視の対象が「多量の存在物」からそれらの包摂主である「領域」や「基本動作」へ移行し、「分布様態」や「動作の非効率性」という解釈が生じるのである。多量を基本義とする重畳形式がこうした意味に変化することは、他言語の言語事実からも支持される。日本語でも「とげ」や「どろ」が重畳形式となり、「とげとげしている」「どろどろしている」と状態化することがある。また、Kouwenberg & LaCharité2005 はカリブ語のクレオールを例として、重畳形式の「多量 increased quantity」の意味が「分散的存在 scattered presence」の意味に変化することを論じている。

2 つ目の状態化プロセスはメトニミーである。これはごく一部の個別の成員に見られるものであり、「原因から結果へのメトニミー」に基づいている。A、B の存在から連想される状態を表すもので、「風と火の存在」が「勢いのよい状況」を生み出すという因果関係の隣接性をもとに成立する“风风火火”といったものがこれに当たる。

このように、品詞の別に拘わらず、A A B B 形式に共通の状態化プロセスが存在していることは極めて重要である。近年、A A B B 及びそれを含む重畳形式全体に共通する核心的意味を探ろうとする研究が進められており、興味深い成果が挙げられているが、本稿の分析はこうした体系的研究の進展と精緻化に貢献し得るものであると考える。

ただし、本稿で十分に検討しきれなかった問題もある。例えば、本稿では状態とみなさなかつた“说说笑笑”“搂搂抱抱”などの成員が、先行研究で状態化した成員として扱われている問題である。仮にこれらを状態化したものとみなすならば、これらには本稿で論じたものとは別の意味派生プロセスが関わっている可能性があり、稿を改めて検討する必要がある。今はこの点を措くとすれば、本稿の結論はおよそ以下の表のようにまとめられる。

表 体詞 A A B B と動詞 A A B B の状態化プロセス

		体詞 A A B B	動詞 A A B B
状態化プロセス	図と地の反転	〈甲類〉坑坑洼洼、斑斑点点……	嘟嘟啾啾、摇摇晃晃……
	メトニミー	〈乙類〉风风火火、婆婆妈妈……	偷偷摸摸
	?		说说笑笑……

## 註

- <sup>1</sup> 本稿の用例の多くは、北京大学中国語言研究中心語料庫（CCL コーパス）から採ったものである。
- <sup>2</sup> 形容詞重畳形式の基本義については諸説ある。この点については石侵 2010 が詳しい。
- <sup>3</sup> 語および品詞の認定は、《現代汉语词典（第6版）》（2012年、商务印书馆）に基づく。
- <sup>4</sup> ただし、“来往”のように、原型が“来”と“往”のような反義語ペアから構成される場合は、A・B間の意味関係がAABB全体の意味に影響を与えることがある。筆者が池田 2013 において、「AABBから抽出される最少の語を原型とみなす」という本稿と異なる基準を採用したのは、A・B間の意味関係を強調することで、動詞AABBを更にいくつかの下位分類する必要があったからである。
- <sup>5</sup> 例えば“子子孙孙”のように、連用修飾語機能は持つが、述語機能を持たないものは、ひとまず状態義を表すAABBとして扱わないことにする。
- <sup>6</sup> 张谊生 1999:60 は、名詞AABBにおいて、語形変化重畳（“构形重畳”）は述語用法を持たず、語構成重畳（“构词重畳”）のみが述語用法を持つと述べている。张谊生 1999 の基準に従えば、本稿の言う〈甲類〉〈乙類〉はともに語構成重畳として分類されることになるが、张氏は語構成重畳が述語用法を持つ理由については何も言及していない。
- <sup>7</sup> 〈乙類〉“花花草草”は、(7)に挙げた本義の“花花草草〔多数の花や草〕”とは大きく意味が異なるため、別の語として扱った。ただし、“花花草草”の述語用法を許容しない母語話者が少なからずいるようである。
- <sup>8</sup> 広い意味で言えば、これらは一種の「存在文」と見るともできる。事実、大部分の〈甲類〉AABB述語文は、形式的には范方莲 1963 の言う述語動詞が省略されたタイプ（C類）の存在文に酷似している。〈甲類〉AABBは、こうした特殊な存在文を介して、状態義を獲得している可能性もある。
- <sup>9</sup> 以下の2点は池田 2015 の議論をもとに、いくつかの修正を加えたものである。
- <sup>10</sup> “说说笑笑”などについてはしばしば「汎説性（大河内 1969:46）」「代表性（储泽祥 2000:234）」という特徴が指摘されるが、AB（A、B）本来の動作の意味が積極的に表出されるからこそ、こうした特徴を持ち得るのである。
- <sup>11</sup> 態度叙述文については木村 2002:237 を参照。
- <sup>12</sup> VOと“吵吵闹闹”の間に副詞“总是（いつも）”を挿入すると、許容度が上がるようである。この点についてご指摘くださった査読委員の先生に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 池田晋 2013, A A B B型動詞重疊形式の形態と意味, 『木村英樹教授還暦記念中国語学論叢』, 白帝社
- 大河内康憲 1969, 重疊形式と比況性連合構造, 『大阪外国語大学学报』第 21 号
- 太田辰夫 1958, 『中国語歴史文法』, 江南書店
- 木村英樹 2002, 中国語二重主語文の意味と構造, 『認知言語学 I : 事象構造』, 東京大学出版会
- 工藤真由美 1995, 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』, ひつじ書房
- 池田晋 2015, 漢語名詞重疊 AABB 式中状態性凸顯的語義條件, *The Bulletin of Chinese Linguistics*, vol. 8-2
- 儲泽祥 2009, 单音名词的 AABB 叠结现象, 《汉语重叠问题》(汪国胜·谢晓明编), 华中师范大学出版社
- 范方莲 1963, 存在句, 《中国语文》第 5 期
- 石镔 2010, 《汉语形容词重叠形式的历史发展》, 商务印书馆
- 吴吟·邵敬敏 2001, 试论名词 AABB 式语法意义及其他, 《语文研究》第 1 期
- 张斌主编 2010, 《现代汉语描写语法》, 商务印书馆
- 张国宪 2006, 《现代汉语形容词功能与认知研究》, 商务印书馆
- 张恒悦 2012, 《汉语重叠认知研究——以日语为参照系》, 北京大学出版社
- 张谊生 1999, 现代汉语名词的 AABB 复叠式, 《徐州师范大学学报(哲学社会科学版)》vol.25
- 张谊生 2000, 现代汉语动词 AABB 复叠式的内部差异, 《语法研究和探索(九)》, 商务印书馆
- Kouwenberg, S. & LaCharité, D. 2005, Less is More: Evidence from diminutive reduplication in Caribbean Creole language. *Studies on Reduplication*. Bernhard, H. (ed.) Mouton de Gruyter.
- Lakoff, G. 1987, *Women, Fire and Dangerous Things*. The University of Chicago Press.

## 謝辞

本研究は日本学術振興会科研費(若手研究(B):課題番号 26770142)の助成を受けたものである。